

編集後記

ここに『境界を越えて——比較文明学の現在』第15号をお届けする。林文孝先生による巻頭言にもある通り、今年度は小野正嗣先生、西谷修先生という2名の新しい教員スタッフを迎え入れて専攻の1年が始まり、研究交流会も行われた。それに合わせて、この紀要もその在りようを一新することになった。編集者である深澤晃平氏とデザイナーの長田年伸氏をお迎えし、従来より綿密な編集作業を行うとともに、表紙デザインをはじめ各ページのレイアウトも一新した。新しくなった立教比較文明学の研究雑誌は読者諸氏にどのような印象を与えるであろうか。今回の一新は、筆者を除いて創設メンバーではなくなった新しい教員スタッフの、本専攻の未来へ向けたメッセージでもある。常に前へ、境界を越えて、自己革新を続ける比較文明学専攻の姿勢を明確に表現している。

さて、このような今号の紀要だが、内容はどうかであろうか。論文には3本の、研究ノートには2本の投稿があった。審査の結果、論文3本と研究ノート1本が条件付きで掲載が決まったが、原稿修正作業の中で、研究ノート1本が今回の掲載を辞退することになり、結果的に査読は論文3本のみの掲載となった。その他、2013年度優秀修士論文1本の全文、研究交流会の記録2本が例年通り掲載された。さらに、林みどり先生から巻頭論文として特別寄稿をいただいた。改めて感謝したい。

編集途上で起こった本紀要および比較文明学専攻での特記すべき報告事項が2件ある。ひとつは第12号にご寄稿いただいた笹野頼子先生の文章「変わり果てた世間でまだひとつのことを」が、単行本に収録されて改めて出版されたこと。いまひとつは小野正嗣先生が本年1月に第152回芥川賞を受賞されたことである。すでに同賞を受賞しておられた笹野先生に加えて、小野先生が受賞されたことは、本専攻の誉れであるだけでなく、立教大学全体の榮譽でもあり、この上なく悦ばしいことである。改めてお祝いを申し上げる。

今号は深澤、長田両氏のお力によって革新の一步を踏み出すことができた。両氏に御礼申し上げますとともに、次号に向けて更なる進展を心に期して新年度に歩み出したい。

2015年2月
佐々木一也